

2-12.遠江のひよんどりとおくないにみる歴史的風致

(1)はじめに

愛知、長野、静岡の3県境の三遠南信^{さんえんなんしん}地域の山間には、正月初めにそれぞれの地の観音堂、薬師堂、阿弥陀堂などの寺堂で春祈禱の祭り(五穀豊穰、養蚕の収量の多さなどの予祝^{よしゆく}行事)が執り行われ、猿楽、田楽、田遊^{たあそび}といった中世芸能の系脈を引く諸演目を盛り沢山に上演する地域がある。

浜松市でも、浜名湖の北部・都田川^{みやこだがわ}流域に4か所(寺野・川名・東久留女木・滝沢)、天竜川の支流・阿多古川^{あたごがわ}流域に2か所(懐山・神沢)、計6か所に同系の祭り行事が「ひよんどり」「おくない」といった名称で継承されている(近年再開されたものを含む)。稲作を中心に小豆・粟など畑作物や養蚕の豊作も祈念され、当地域のかつての伝統的生業を行事のなかに見ることができる。

いつごろから始まったものか詳らかでないが、中世のころ、当地域を治めていた井伊氏^{つまび}を大旦那に始まったと伝えられているものもある。しかも、演目や芸態の類似性から、点在する行事の担い手が、相互に交流を持ちながら独自に発展させてきたと考えられている。

いずれの行事も、村を開拓した家の子孫が催事や芸能を取り仕切り、地域に暮らす住民相互の連携のなかで受け継がれている。正月行事の中核をなすものとして、地域の信仰やコミュニティ形成を考えるうえで、重要な役割を担っている。

表2-12-1 「ひよんどり」と「おくない」所在地一覧(廃絶したものを含む)

行事名	所在地(区・町)	堂名(通称名)	備考
寺野のひよんどり	浜名区引佐町 ^{いなさちようしが} 川	宝蔵寺 ^{ほうぞうじ} 観音堂 (三日堂) ^{みつかどう}	重要無形民俗文化財 「遠江のひよんどりとおくない」 開催日:1月3日 場所:宝蔵寺 ^{ほうぞうじ} 観音堂
川名のひよんどり	浜名区引佐町 ^{いなさちようかわ} 川 名	福満寺 ^{ふくまんじ} 薬師堂 (八日堂) ^{ようかどう}	重要無形民俗文化財 「遠江のひよんどりとおくない」 開催日:1月4日 場所:福満寺 ^{ふくまんじ} 薬師堂 ^{やくしどう}
懐山のおくない	天竜区 ^{ふとこりやま} 懐山	新福寺 ^{しんぶくじ} 阿弥陀堂 (五日堂) ^{いつかどう}	重要無形民俗文化財 「遠江のひよんどりとおくない」 開催日:1月3日 場所:泰蔵院(新福寺 ^{しんぶくじ} 阿弥陀堂本尊の 阿弥陀如来を安置する) ※新福寺 ^{しんぶくじ} 阿弥陀堂は廃絶

ひがしくるめきまんざいらく 東久留女木の万歳楽	いなさちよう 浜名区引佐町 ひがしくるめき 東久留女木	によいいん 如意院阿弥陀堂	浜松地域遺産認定 「東久留女木の万歳楽」 開催日:2月1日 場所:如意院阿弥陀堂
たきさわ 滝沢のおくない	たきさわちよう 浜名区滝沢町	あんらくじ 安楽寺大日堂 (七日堂)	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 「遠江のシウチ行事」 開催日:1月1日～15日ごろ 場所:四所神社(旧大日堂本堂)及び林慶寺(旧大日堂本尊の大日如来を安置する)
しがかわ 渋川のひよんどり	いなさちようしが 浜名区引佐町渋川	まんぶくじ 万福寺薬師堂 (四日堂)	天保5年(1834)刊行の『遠淡海地志』に「鶴踊 引佐郡渋川村正月四日夜有之」と記されており、特色ある祭りとして遠州地方に広く知られていたことが分かる。 ※行事・堂とも廃絶
かんざわ 神澤おくない	かんざわ 天竜区神沢	まんぶくじ 万福寺阿弥陀堂 (五日堂)	開催日:1月4日 場所:神沢地区内集会施設 ※昭和30年代に休止、平成21年(2009)再開、万福寺阿弥陀堂は廃絶
くろさわ 黒沢の田楽	しんしろし 愛知県新城市 ななさといつしき 七郷一色	ほうふくじ 峯福寺阿弥陀堂 (六日堂)	重要無形民俗文化財 「三河の田楽」 開催日:2月1日 場所:峯福寺阿弥陀堂 ※平成29年(2017)から休止
かりしゆく 狩宿のひよんどり	いなさちようかり 浜名区引佐町狩宿	ヒヨンドリ堂	天保5年(1834)刊行の『遠淡海地志』に「狩宿村 ヒヨンドリ堂 正月九日夜」と記されており、特色ある祭りとして遠州地方に広く知られていたことが分かる。 ※行事・堂とも廃絶

※寺堂の名称はそれぞれの祭事が行われていた日にちを冠し、通称「三日堂」などと呼ばれている。



図2-12-1 寺野集落



図2-12-2 懐山集落



図2-12-3 神沢集落



図2-12-4 滝沢集落



図2-12-5 川名集落



図2-12-6 東久留女木集落

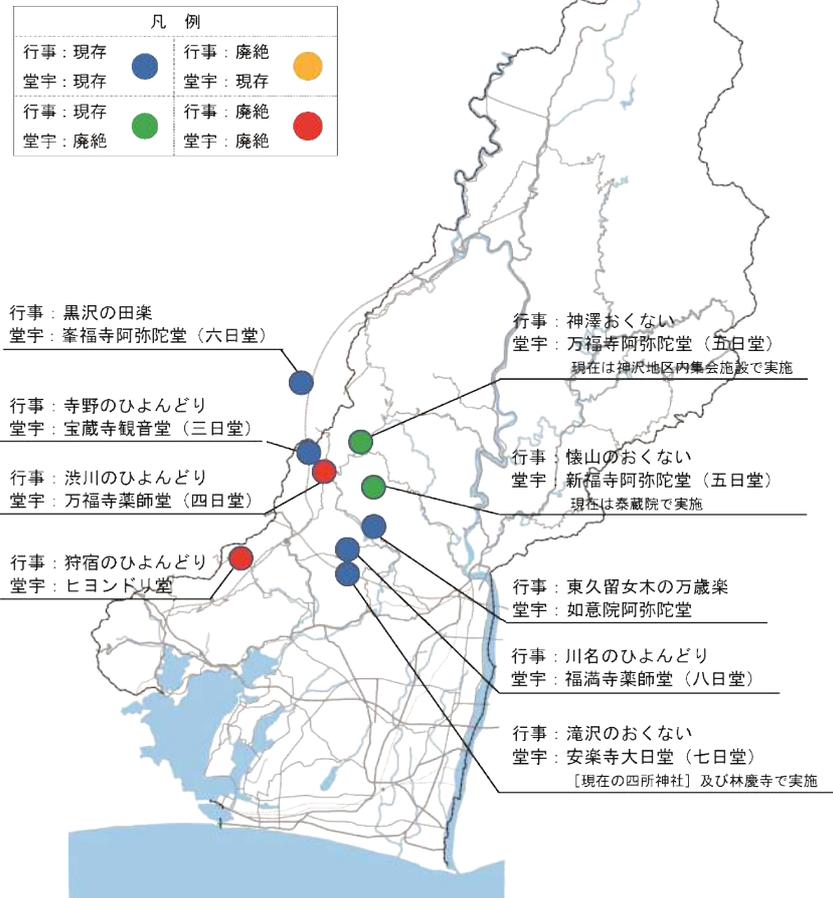


図2-12-7 ひよんどりとおくない位置

(2)寺野のひよんどり

①寺野のひよんどりの歴史

寺野のひよんどりは、**宝蔵寺観音堂**(通称**三日堂**)において、毎年1月3日に行われる五穀豊穰を祈る春祈禱の祭りである。その起源は定かではないが、寺野の祖といわれる**伊藤刑部祐雄**(伊豆の伊東氏の流れをくむ)が当地(寺野)に入植した元亀年間(1570-1573)ごろに始められたと考えられている。元禄8年(1695)正月の詞章本が禰宜家に残されていることから、今につながる寺野のひよんどりが17世紀末には行われていたことが分かる。



図2-12-8 祭礼当日の様子

「ひよんどり」の名称は、観音堂の外陣において一同が松明を持って輪になって踊る火踊りが印象的なことから、それがなまって「ひよんどり」となったと考えられている。

かつては、旧暦正月3日、世襲の講衆こうしゅうによって執り行われてきた。しかし、昭和30年代、もはや戦後ではないという流行語とともに、当地の人々も高度成長を享受し始めるようになったころ、社会情勢と人々の意識の変化を受け、一時休止したこともあった。ところが「ひよんどり」は、その後すぐに再開する。昭和36年(1961)、世襲の組織をあらため、寺野地区全戸が参加する保存会が設立された。わずかな期間ではあるが、伝統の行事を一旦休止したことで、「ひよんどり」が当地の人々の絆をつなぐ大切な行事として再認識され、以前にも増して伝承活動が盛んになり、現在に至っている。

近年、三遠南信自動車道の**渋川寺野インターチェンジ**の開設や、中山間地域の少子高齢化や人口減少など当地に暮らす人々の環境や生活も大きく変化してきているが、寺野地区全戸が会員となっている保存会と自治会とが連携することで「ひよんどり」の伝承に努めている。

②寺野のひよんどりに関する建造物

ア.宝蔵寺観音堂(通称:三日堂)

浜名区引佐町**渋川寺野**の「**宝蔵寺観音堂**」は、通称**三日堂**といい、毎年1月3日に寺野のひよんどりが行われる寺堂である。観音堂は、現存する最古の棟札から、慶長15年(1610)には創建されたことが分かる。寺野集落の開拓は元亀年間(1570-1573)と伝えられており、村が発展していく過程でひよんどりを行う堂宇が建てられたと考えられている。その後、幾度か立て直され、現在の建物は享保13年



図2-12-9 宝蔵寺観音堂(通称三日堂)

(1728)に再建されたものであることが棟札により判明している。大正 15 年(1926)には草葺から杉皮葺へ、昭和 31 年(1956)には杉皮葺から瓦葺へ、平成 11 年(1999)には瓦葺から金属板葺への屋根修理が行われている。

桁行 3 間、梁間 5 間、寄棟造、平入、金属板葺の観音堂は、前後に 3 間と 2 間に分かれ、境には格子・壁・片引きの戸を建てる。手前 3 間を外陣、奥 2 間を内陣とし、内陣中央に仏壇を配し、外陣をひよんどりを舞う舞台として用いられる。正面はいずれも取り外し可能な引き分け戸と腰壁・^{しとみど}蔀戸が設えられており、全て開放できるようになっている。舞台として用いるための機能的な構造を有している。

③^{てらの}寺野のひよんどりに関する活動

ア.^{てらの}寺野のひよんどり

^{てらの}寺野のひよんどりは、1 月 3 日に行われる。当日午後 2 時、^{ほうぞうじ}宝蔵寺^{みつかどう}観音堂(三日堂)での行事に先立ち、^{てらの}伽藍祭りが執り行われる。これは、地の神、つまり^{てらの}寺野元祖の供養として、寺堂に隣接する^{いとうぎょうぶすけかつ}伽藍様^{いとうぎょうぶすけかつ}の前で厳かに執り行われる。^{まんざいらく}伽藍様には伊藤 刑部 祐雄の木造が祀られており、御神楽(神降し・^{まんざいらく}順の舞・^{まんざいらく}万歳楽)の奉納が行われる。

伽藍祭りが終わりに近づくころ、寺堂では松明を振る仕草が印象的なひよんどり(火踊り)が始まる。堂内の一団が詞章を唱えながら松明を手に持ち堂内を回る。

その後、堂内外陣に、禰宜・太鼓を打つ^{すりかね}楽頭・^{すりかね}摺鉦・^{すりかね}笛の役が位置につき、舞の奉納が行われる。^{すりかね}伽藍祭りと同じ御神楽から始まり、子供が演じる三つ舞、^{かたつるぎ}真剣を用いる^{かたつるぎ}片剣の舞と^{りょうつるぎ}両剣の舞と続く。^{かたつるぎ}片剣及び^{りょうつるぎ}両剣の舞では、本舞が終了する直前、もどきと呼ばれる滑稽味を帯びた奔放な乱舞を行う役が登場し、早さが要求される激しい動きのある舞を演じる。矛の舞、^{あわほ}粟穂の舞といった男性を象徴する採り物を用いた舞も行われ、子孫繁栄から五穀豊穡への所作が展開する。午後 5 時を過ぎ、暮れかかる空が次第に光を失うころ、松明を用いる獅子の舞と鬼の舞が行われる。特に鬼の舞は、3 匹の鬼が激しく舞い踊り、最後に松明の火をヨキなどの採り物で乱打し消していく。^{てらの}寺野のひよんどりの行事全体を印象づける舞で会場の盛り上がりが最高潮に達する。最後に^{てらの}鎮めの舞であるねこぎねの舞を行い、^{てらの}寺野のひよんどりは終了となる。



図2-12-10 ひよんどり(火踊り)



図2-12-11 鬼の舞

表2-12-2 寺野のひよんどり次第

行事・時間		内容
内陣準備	午前 8 時 30 分	新年祭、面さすり
御手洗井戸での清め	午後 1 時 50 分	
伽藍祭り	午後 2 時 00 分	御神楽(神降し、順の舞、万歳楽)
本堂祭り	午後 2 時 10 分	ひよんどり(火踊り) 御神楽 三つ舞 かたつるぎ 片剣の舞・もどき りょうつるぎ 両剣の舞・もどき ひのう 火王の舞・もどき 矛の舞 あわほ 粟穂の舞 杵の舞 女郎の舞 翁 松かげ 獅子の舞 鬼の舞 ねござねの舞
祭礼終了	午後 6 時 00 分ごろ	祭礼終了

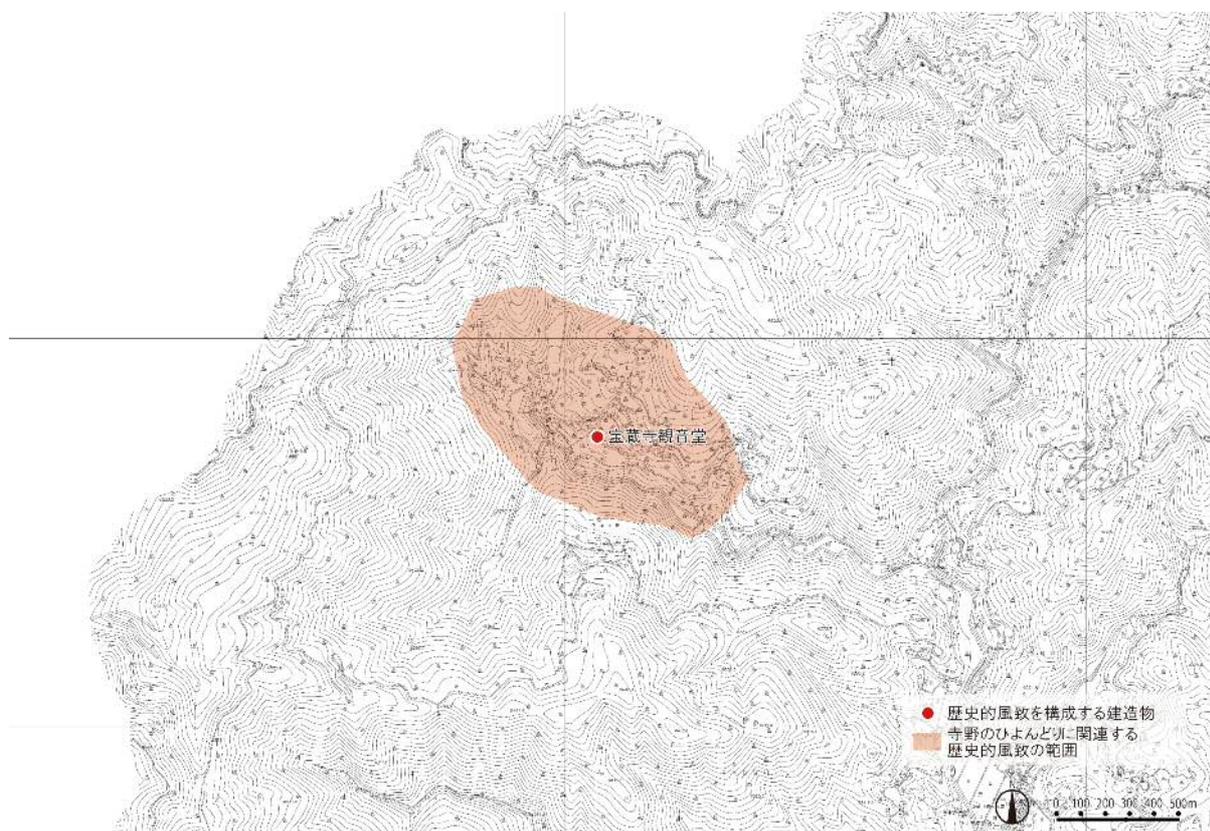


図2-12-12 歴史的風致の範囲(寺野のひよんどり)

(3)川名のひよんどり

①川名のひよんどりの歴史

川名のひよんどりは、福満寺薬師堂(通称八日堂)において、毎年1月4日に行われる五穀豊穡・子孫繁栄を祈る春祈禱の祭りである。ひよんどりが行われる薬師堂本尊の木造薬師如来坐像が造立された応永33年(1426)には行われていたと考えられているが、現在の形となった時期は定かでない。宝暦9年(1759)や寛政3年(1791)の詞章本が残されていることから、18世紀半ば以降には現在につながる形で行われていたことが分かる。

「ひよんどり」名称の由来は、寺野の場合とやや趣を異にしており、堂内での行事の始めに祭りに携わる者一行が松明を灯して薬師堂へ献上するために上がり込んでくるところを、裸の若連(ヒドリ役)が入口で通せんぼして揉み合いとなる次第が印象的であることから名付けられたといわれている。

かつては、旧暦正月8日、大禰宜、小禰宜、堂守(団子積み)などの世襲の家の者によって執り行われてきた。村の成立時の家々の系譜にのっとっているのではないかとされており、各家々でひよんどり行事を進めるための道具作りに関わる特殊技能を伝えている。『川名のシシウチ行事―国選択無形民俗文化財記録保存報告―』(昭和63年(1988))によると、戦後、社会情勢や人々の就業形態の変化を受け、昭和40年(1965)から行事日程を1月4日に変更し、薬師堂での行事はじめ、川名地域で正月行事として行われていた「シシウチ神事」「的打ち神事」「ひよんどり」諸行事を4日の1日で行うようになった。昭和49年(1974)の静岡県無形民俗文化財の指定を契機に保存会が設立された。従来からの諸役である世襲の家々・年齢階梯集団の若連のほか、自治会との連携が図られるとともに、文化財少年団が組織され小学校への指導が定期的に行われるなど、伝承活動が盛んとなり、現在に至っている。

近年、川名幼稚園・小学校の統廃合に代表される中山間地域の少子高齢化や人口減少など、地域の環境や人々の生活も大きく変わりつつある。保存会と自治会が連携することで川名の地に伝えられている「ひよんどり」の継承活動に取り組んでいる。

②川名のひよんどりに関する建造物

ア.福満寺薬師堂(通称:八日堂)

浜名区引佐町川名の「福満寺薬師堂」は、通称八日堂といい、毎年1月4日に川名のひよんどりが行われる寺堂である。薬師堂は、大正11年(1922)刊行『静岡県引佐郡誌』記載の由緒及び本尊である木造薬師如来坐像の胎内銘から、応永33年(1426)に創建されたと考えられている。その後、焼失や地震による倒壊の影響で数度再建されていることが棟



図2-12-13 福満寺薬師堂(通称八日堂)

札により確認できる。桁行3間、梁間3.5間、寄棟造、平入、金属板葺の現在の堂宇は、安政5年(1858)の建築であることが棟札により判明しており、昭和29年(1954)には茅葺屋根を瓦葺屋根に、平成21年(2009)には瓦葺屋根を金属板葺屋根に改修している。また、薬師堂に伝えられている文永4年(1447)の銘がある鰐口は、浜松市の指定文化財となっている。

堂内前方2間を外陣、後方1間を内陣とし、中央部間口1間に奥行半間の仏壇を備えており、寺野のひよんどりが行われる宝蔵寺観音堂と同じ形式をとっている。堂の東に接して、桁行12尺、梁間9尺、切妻造、金属板葺の若衆宿が建ち、ひよんどり祭礼に参加する若連の控え場所として用いられている。

イ.伊豆神社

福満寺薬師堂の西隣に鎮座する伊豆神社は、瓊瓊杵命を祭神とする川名地区の氏神である。創建年代は不明だが、『伊豆の権現様が銅履(銅製の下駄)を履いて当地に飛来してきたことから、村人は氏神として伊豆権現を祀るようになった』という伝承が伝えられている。寛文元年(1661)の社殿再建棟札があることから、江戸時代前期には氏神として地域の信仰を集めていたことが分かる。

社殿は、本殿、幣殿、拝殿で構成されており、境内社として津島神社と若宮神社を祀る。桁行2間、梁間3間、入母屋造、平入、瓦葺の拝殿など現在の社殿は、棟札により明治38年(1905)に建立されたことが分かる。また、明治24年(1891)の刻銘がある石灯笼や大正4年(1915)の刻銘がある石鳥居ほか昭和6年(1931)の手水鉢や昭和10年(1935)に寄進された社標が境内に残る。

ひよんどり祭礼では、拝殿が受付及び保存会詰所として用いられるほか、境内では若連の練りが行われ、勇壮な歌や掛け声が周囲に響き渡る。

ウ.六所神社

福満寺薬師堂と伊豆神社の南、川名川右岸、三岳山麓の石灰岩露頭が立ち並ぶ平坦地に六所神社が鎮座する。創建は定かでないが、伊豆神社が川名の氏神になる前は、六所神社が氏神であったといわれており、最古の棟札は永享8年(1436)造立時のものが残されている。天照大神・事代主命・宮簀媛命・底筒男命・中筒男命・表筒男命の6柱を祭神とする。

現在の本殿は、一間社流造、板葺、石灰岩の礎石上に建ち、建物を覆うように覆屋が設けられている。寛文6年(1666)に建立されていることが棟札により分かっており、明治4年



図2-12-14 伊豆神社 拝殿



図2-12-15 伊豆神社(左)と福満寺薬師堂(右)

(1871)の『川名村宮社絵図明細取調帳』にも掲載されている。社殿横の石灰岩露頭には石造えんの役行者倚像が祀られており、奉納額から寛政3年(1791)に建立されたことが分かる。

ひよんどり祭礼では、本殿前でシシウチ行事が行われ、行事で用いた道具が神前に供えられる。



図2-12-16 六所神社



図2-12-17 役行者

③川名のひよんどりに関する活動

ア.川名のひよんどり

a.ひよんどりの運営

川名のひよんどりは、1月4日に行われる。当日午前8時過ぎ、福満寺薬師堂(八日堂)の外陣ふくまんじに関係者が集まる。その後、禰宜どうもりや堂守わかれんなど世襲の家々や若連が各自の役割に分かれて準備に取り組む。

禰宜は、田遊びや舞で使う道具、オタイと呼ばれる松明やシシウチ行事で用いる諸用具を作る。夕方近くになると、大禰宜がツモノケメシと呼ばれる仏前の供え物を作る。このツモノケメシが盛られる三方には宝暦8年(1756)の銘がある。堂守は内陣どうもりに供える長さ約9メートルの注連縄しめなわを編むとともに、内陣の飾り付けを行う。縄作りのために堂守が集まる家を綱宿つなやどと呼び、世襲の8家が交代で務める。若連わかれんや自治会、保存会は薬師堂参道や外陣の飾り付けを行う。暖をとるためのたき火や見学者へ振る舞う甘酒の準備も行われる。



図2-12-18 綱宿での準備



図2-12-19 若連の準備

表2-12-3 川名のひよんどり諸役

名称	役割
大禰宜・小禰宜	ひよんどり祭礼の全体に関わり、行事で用いる道具製作からシシウチ行事、ツモノケメシ作りなどを行う。(大禰宜5家、小禰宜5家)
タイトボシ	オタイ(松明)献納役。(1家)
どうもり堂守	内陣での営みの一切を取り仕切る。内陣に供える注連縄を編む。(8家)
僧	けいろうんじ 溪雲寺住職。伽藍しずめの読経などを行う。(1人)
僧の供	僧を助ける役で、僧の送迎、薬師宝印作りを行う。(1家)
わかれん若連	18歳から30歳までの若者で、ひよんどり祭礼の下働きをする。ヒドリ役のほか堂内での舞を担当する。(ヒドリ役は6人)
保存会・自治会	ひよんどり祭礼の世襲の諸役で行うこと以外の部分を担う。境内や禊場所の掃除、売店設置などの見学者対応、のぼり立てなどの諸準備を行う。また、舞の練習・指導のほか、笛・太鼓の楽を奏する。
消防団	オタイ入堂時の消防警護のほか、駐車場の整理誘導、交通案内等を行う。

b.シシウチの行事

午後2時、シシウチ行事が行われる。シシウチ行事とは、田畑の害獣である猪を捕獲または追放しようという願いを込め、模造の猪を弓で射ることで一年の豊作と無事を祈願する行事である。薬師堂の南に位置する六所神社がシシウチと的打ちの会場となる。大禰宜・小禰宜がシシウチ・的打ちの祭具(弓矢・シシ・シカ・的・御幣・御供)を持って出発する。シシは香柴、シカは榊、的は松の木をナタで割いた板を組んで作る。シシと的は射るが、シカは神様ということで射らない。いずれも矢を射る際「弓矢ヒョウヒョウ 胡麻ハサラサラ オ手ニトマリテオ鷹ユラユラ」と唱える。その後、シシは人目につかないところに納め、シカや弓矢は神社に供えられ、シシウチ行事は終了となる。



図2-12-20 シシウチ行事

c.若連練り・水垢離、オタイ入堂

午後6時、松明と揉み合うヒドリ役の若連^{わかれん}が川名川^{かわな}へ禊に出発する。薬師堂内で練って体を温めたあと、堂外に飛び出し伊豆神社境内などで「練り歌」を歌いながら、ヒドリ役以外の若連^{わかれん}とさらに激しく揉み合いながら川へ向かう。禊の場である川名川^{かわな}に到着すると、勢いよく川に飛び込み、寒さをこらえながら水垢離をとる。

午後7時前、ヒドリ役が川から薬師堂に戻り、堂の入口に並んでオタイという松明の入堂を阻もうとする。ヒドリ役を松明(オタイ)で煽る役であるタイトボシが、松明(オタイ)を持って薬師堂の前に上ってきたあと、堂前に立ちふさがるヒドリ役をあぶるように松明(オタ

イ)を振る。ヒドリ役は炎の熱さに耐えながら「ばあー あきよ ばあー あきよ(場を開けよ)」と叫びながら体を左右に動かし必死に松明(オタイ)の入堂を防ぐ。

見物している若連わかれんOBなどから応援とも罵声ともとれない声が飛び、会場の盛り上がりは最高潮に達する。やがて松明(オタイ)はヒドリ役の人垣を破って堂内に突入し、本尊前に松明(オタイ)が供えられ、堂内行事が始められる。



図2-12-21 水垢離



図2-12-22 オタイ入堂

d. 堂内行事

大禰宜が「奉読福満寺薬師如来」を読むウタヨミから堂内行事が始まる。この詞章本は宝暦9年(1759)のものをはじめ、寛政3年(1791)本、安政4年(1857)本、万延2年(1861)本、昭和14年(1939)本が伝えられており、いずれも新年を寿ぐ内容が記されている。続いて、大禰宜・小禰宜による禰宜の舞が行われる。ヤンシャ・万歳楽・チントトと呼ばれる舞が行われ、五方に舞って舞庭を清める。その後、子供、年齢集団である若連わかれんや中老ちゆうろうなどによる舞が行われ、後半では、綱宿で堂守が編んだ注連縄しめなわを体に巻き付けて舞う片稻叢かたいなむらの舞や両稻叢りょういなむらの舞が行われる。稲叢いなむらを巻き付けているところから稲霊の出現を表しており、稲の豊作を願う川名かわなの特色ある舞である。舞が終了すると、一旦堂外へ出て伽藍鎮めを行う。最後に稲魂を具象化したものと考えられている「オブッコサマ」と呼ばれる人形が登場する。御飯に味噌汁をかけた「汁掛け飯」を進上したあと、堂内で祭礼に参加した一同が汁掛け飯を共食して、ひよんどり祭礼が終了する。川名では汁掛け飯を食べると雨が降ると言われており、汁掛け飯を食べることで稲作に必要な福水を乞う意味がある。



図2-12-23 両稻叢の舞



図2-12-24 伽藍鎮め

表2-12-4 川名のひよんどり次第

行事・時間		内容																												
開会式	午前8時 15分	福満寺薬師堂外陣集合・開会式																												
諸役準備	午前8時 30分	禰宜:猪・鹿等儀式道具作り 堂守:綱宿にて薬師様に備える綱作り 若連・中老:注連縄造り																												
昼食	午後0時 00分	昼食																												
シシウチ行事	午後2時 00分	シシウチ行事:香柴で作った猪と鹿を六所神社に供える 猪を射るが鹿は射ない 的打ち行事:六所神社前の田に立てた的を射る																												
若連続り・水垢離	午後6時 00分	若連続り:福満寺薬師堂～川名川～福満寺薬師堂 水垢離:ヒドリ役が練り歌を歌いながら川名川に入って禊をする																												
オタイ入堂	午後7時 00分	身を清めたヒドリ役の若者が注連縄を腰に巻いて堂の前に立つ 松明(オタイ)を持った大禰宜(タイトボシ)が堂に到着 ヒドリ役の若者を炙るように松明を左右に振りながら堂に入堂 ヒドリ役の若者を越えて入堂した火は本尊の薬師如来に献じられる																												
堂内行事	午後7時 30分	<table border="0"> <tr> <td>禰宜によるウタヨミ</td> <td>→</td> <td>禰宜の舞</td> <td>→</td> </tr> <tr> <td>順の舞(正) 小学生</td> <td>→</td> <td>おんばの舞</td> <td>→</td> </tr> <tr> <td>順の舞(大) 小学生</td> <td>→</td> <td>はらみの舞</td> <td>→</td> </tr> <tr> <td>片剣の舞 小学生</td> <td>→</td> <td>片稻叢の舞</td> <td>→</td> </tr> <tr> <td>両剣の舞</td> <td>→</td> <td>両稻叢の舞</td> <td>→</td> </tr> <tr> <td>獅子の舞</td> <td>→</td> <td>伽藍しずめ</td> <td>→</td> </tr> <tr> <td>田遊び</td> <td>→</td> <td>オブッコ 汁掛け飯</td> <td></td> </tr> </table>	禰宜によるウタヨミ	→	禰宜の舞	→	順の舞(正) 小学生	→	おんばの舞	→	順の舞(大) 小学生	→	はらみの舞	→	片剣の舞 小学生	→	片稻叢の舞	→	両剣の舞	→	両稻叢の舞	→	獅子の舞	→	伽藍しずめ	→	田遊び	→	オブッコ 汁掛け飯	
禰宜によるウタヨミ	→	禰宜の舞	→																											
順の舞(正) 小学生	→	おんばの舞	→																											
順の舞(大) 小学生	→	はらみの舞	→																											
片剣の舞 小学生	→	片稻叢の舞	→																											
両剣の舞	→	両稻叢の舞	→																											
獅子の舞	→	伽藍しずめ	→																											
田遊び	→	オブッコ 汁掛け飯																												
祭礼終了	午後 10時 00分ごろ	祭礼終了																												

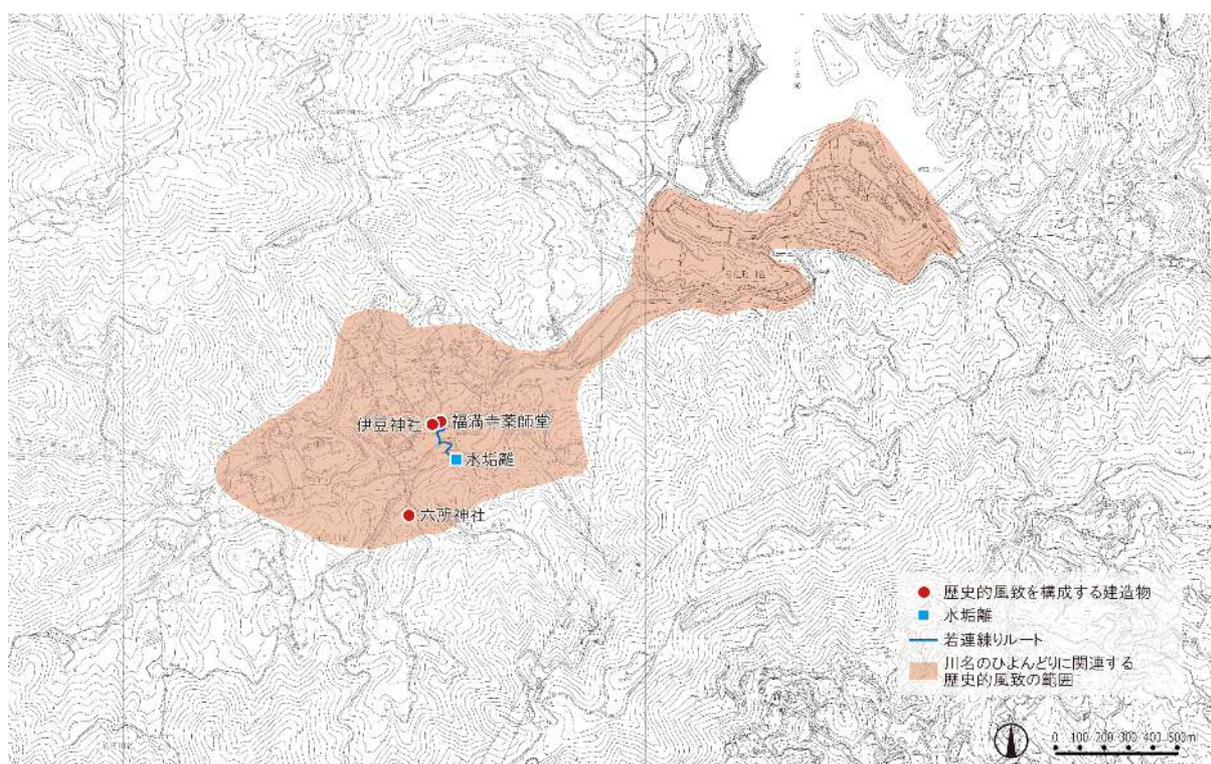


図2-12-25 歴史的風致の範囲(川名のひよんどり)

(4) 懐山のおくない

① 懐山のおくないの歴史

懐山のおくないは、泰蔵院において、毎年1月3日に行われる豊作祈念、子孫繁栄を祈る春祈禱の祭りである。懐山のおくないがいつ始まったか定かでないが、猿楽能の曲が伝えられていることから中世には原型となる芸能が行われていたと考えられている。安政2年(1855)の詞章本が残されていることから、江戸末期には今日の型が出来上がっていたことが分かる。

「おくない」の名称は、寺院の修正会・修二会といった法会に由来する正月や春先の祭りである「おこない」がなまったものと伝えられている。祭礼を取り仕切る組織のようなものは確認されていないが、面清めを受け持つ禰宜と鍵取りを中心に懐山地区をあげて伝承してきた。

かつては、新福寺阿弥陀堂(通称五日堂)で旧暦1月5日に行われていたが、明治初年の廃仏毀釈の際に本尊阿弥陀如来を泰蔵院に移し阿弥陀堂も失われた。祭礼日も、大正期に4日になり、昭和30年代に3日となり現在に至っている。昭和48年(1973)には懐山地区の全戸が加入する保存会を設立、昭和53年(1978)からは地元の旧上阿多古中学校(現清竜中学校)で生徒への指導を始めた。

中山間地域の民俗芸能として、少子高齢化の影響を受けながらも、保存会と地元中学校との連携により「おくない」の伝承に努めている。

② 懐山のおくないに関する建造物

A. 泰蔵院本堂

天竜区懐山の泰蔵院は、臨済宗方広寺派の寺院で、毎年1月3日に懐山のおくないが本堂で行われる。泰蔵院の創建は詳らかでないが、桁行7間、梁間5間、寄棟造、平入、金属板葺の現在の本堂は、『懐山区有文書』によると弘化4年(1847)火災による焼失後、嘉永元年(1848)から再建に着手したと伝えられている。明治17年(1884)の修理部材墨書や明治34年(1901)の修理奉納額により、明治期には現在の本堂があったことが分かっている。おくない行事がいつから泰蔵院で行われるようになったか詳らかでないが、廃仏毀釈の際、本尊阿弥陀如来が泰蔵院に移されたあとから行われるようになったと伝えられている。昭和20年(1945)に行われたおくないの様子を記録した新井恒易「懐山 新福寺阿弥陀堂の芸能」『中世芸能の研究』(昭和45年(1970))には、現在の本堂で行われていたことが記されている。



図2-12-26 泰蔵院本堂

現在の本堂があったことが分かっている。おくない行事がいつから泰蔵院で行われるようになったか詳らかでないが、廃仏毀釈の際、本尊阿弥陀如来が泰蔵院に移されたあとから行われるようになったと伝えられている。昭和20年(1945)に行われたおくないの様子を記録した新井恒易「懐山 新福寺阿弥陀堂の芸能」『中世芸能の研究』(昭和45年(1970))には、現在の本堂で行われていたことが記されている。

この本堂は、寺野や川名のような舞台として用いるための機能的な構造を有しているわけではないため、上奥の間に阿弥陀如来を祀り内陣を想定している。上奥の間手前の上間を外陣と想定し、その間を簾と注連縄で仕切る。本堂中央に設えられている仏間は、おくないでは使用していない。

③ 懐山ふところやまのおくないに関する活動

ア. 懐山ふところやまのおくない

懐山ふところやまのおくないは、1月3日に行われる。午前中、かつての新福寺しんぶくじ阿弥陀堂近くの不動様の滝の水を汲み、泰蔵院たいぞういんの飾り付けを行うなど、おくないの準備をする。午後1時ごろ、保存会関係者が参集すると内陣で阿弥陀様の祭りが執り行われる。不動様の滝の水が面清めで使われる。その後、一同は泰蔵院裏の伽藍たいぞういん様の祠に向かい、伽藍様の祭りを執り行う。この祭りを行ったあと、泰蔵院たいぞういんでの祭りが始まる。

外陣に鈴・笛・太鼓・鉦の楽が位置につき、芸能の奉納が行われる。懐山ふところやまのおくないでは、他のひよんどりやおくないに比べ、稲作・畑作・養蚕といった生業に関する多様な演目が含まれている。また、伯楽・馬主・馬の3者が登場し問答を繰り広げる「駒の舞」をはじめ、綿を買い付けに来た客と売り手の問答を中心とした演目「綿買い」など、即興的狂言風の非稲作系演目がユーモラスに演じられているのが特徴である。夕日が山の稜線りょうせんに没して外陣に夕暮れのほの暗さが訪れるころ、おくないはいよいよ終盤を迎える。「夜明けの獅子」が登場し祭りの清めを行い、使用した採り物や装束などをまとめ、笛・太鼓・鈴を鳴らして清める「舞おさめ」で終了となる。



図2-12-27 伽藍様の祭り



図2-12-28 駒の舞

表2-12-5 懐山のおくない次第

行事・時間		内容	
準備	午前中	不動様の水汲み 内陣・外陣の飾り付け(香柴立て等)	
前段祭事	午後1時00分ごろ	阿弥陀様の祭り 面清め 三三九度の盃	
伽藍様の祭り	午後1時20分	開帳 献饌(七十五膳と呼ばれる餅を供える) 神の舞	
泰蔵院 <small>たいざういん</small> の祭り	午後1時40分	神の舞 → 槍の舞・もどき → 両剣 <small>りょうつるぎ</small> の舞・もどき → 松かげ → 仏の舞 → 年男 → 女郎の舞 → 猿追い → 塩買い → 悪魔払い → 田遊び →	三つ舞 → 片剣 <small>かたつるぎ</small> の舞・もどき → 翁 → 宵の獅子 → 鬼の舞 → 稲むら → 駒の舞 → 綿買い → 山ヶ田遊び → 夜明けの獅子 → 舞おさめ
祭礼終了	午後6時00分ごろ	祭礼終了	

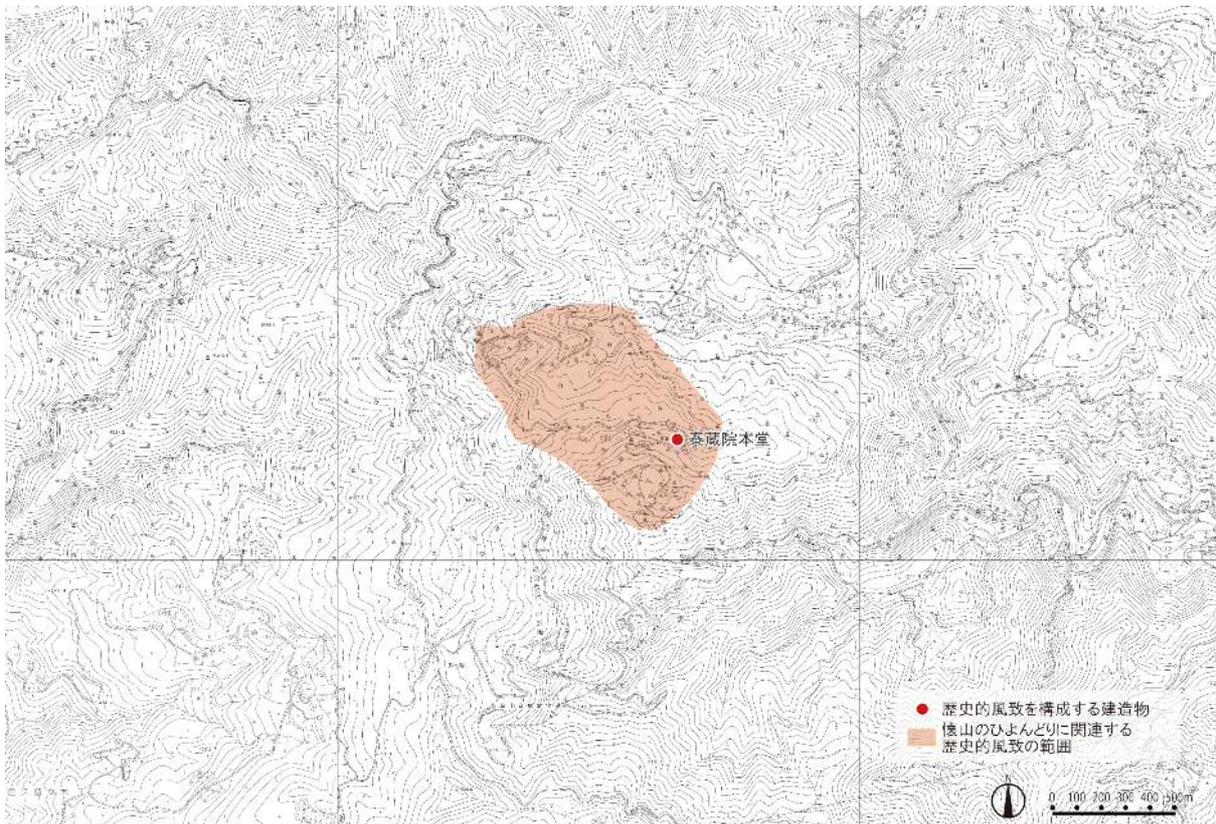


図2-12-29 歴史的風致の範囲(懐山のおくない)

(5) 東久留女木の万歳楽

① 東久留女木の万歳楽の歴史

東久留女木の万歳楽は、如意院の阿弥陀堂において、毎年2月1日に行われる豊作祈念などを祈る春祈禱の祭りである。その起源は定かでないが、禰宜を務める仲井家の先祖(井伊家臣・中井七右衛門)が当地に移り住んだ16世紀半ばには行われていたと考えられている。天保5年(1834)刊行の『遠淡海地志』に「久留女木村 ヒヨドリ 正月十七日、当村」と記されていることから、今に伝わる万歳楽を含む「久留女木のひよんどり」ともいうべき祭事が江戸後期には行われていたことが分かる。かつては寺野や川名に伝えられているような多様な演目を行っていたと考えられるが、芸能や面がいつ失われたのか詳らかではない。如意院の記録によると大正11年(1922)祭り自体を取りやめたところ、直後の3月4日、東久留女木地区の半数を焼失する大火に見舞われた。村人は祭りをやめたことで災いが起きたのではないかと心配し、翌年再開し、現在に至っている。

② 東久留女木の万歳楽に関する建造物

ア. 如意院

浜名区引佐町 東久留女木に所在する臨済宗方広寺派の寺院である如意院は、寺伝によると、天文11年(1542)当地を治めていた井伊直宗の妻・浄心院により創建されたと伝えられている。都田川と東久留女木集落を南に臨む河岸段丘に建つ。境内は斜面に石垣を積んで造られた平地が東西に広がっており、本堂、庫裡などが配されている。虚空蔵菩薩を本尊とし、山号を宝珠山と号する。

毎年2月1日に万歳楽が行われる阿弥陀堂は本堂の東に位置している。建立は詳らかでないが、本尊の阿弥陀如来坐像が浄心院の念持仏と伝えられていることから、如意院の創建から間もない16世紀後半には建てられていたと考えられる。現在の建物は、桁行3間、梁間3間、宝形造、金属板葺、建築年は定かでないが如意院の記録によると東久留女木地区の半数が焼失した大正11年(1922)の大火を免れていることから、それ以前の建築であることが分かっている。

万歳楽当日は、阿弥陀堂に東久留女木地区28戸から人々が集まり、久留女木の棚田で栽培されたお米を使った「おぶっこめし」が浄心院ゆかりの本尊に献上される。



図2-12-30 如意院



図2-12-31 如意院阿弥陀堂

イ. 浄心院廟所

如意院の東側、山道を 600 メートルほど進んだ東久留女木集落を見下ろす斜面に、如意院の開基、浄心院の廟所がある。建立年は定かでないが『彦根藩井伊家文書(彦根城博物館蔵井伊家伝来古文書)』には、安政 4 年(1857) 浄心院廟所の修理に際し、彦根藩が費用を用立てたことが記されている。その後、当地に住む仲井家一門(浄心院に従い当地に入植した中井七右衛門の子孫)により明治初年(1868) ころ再整備され、現在に至っている。今なおお命日には供養祭が執り行われるとともに、万歳楽当日には仲井家一門の参加者が墓前を通り阿弥陀堂へ向かう。



図2-12-32 浄心院の墓塔

ウ. 久留女木の棚田(棚田百選)

浜名区引佐町の西久留女木と東久留女木にまたがる観音山の南西斜面に広がる久留女木の棚田は、標高 250 メートル付近に位置し、総面積 7.7 ヘクタールに約 800 枚の棚田が配されている。近隣に民家はなく、斜面地全体に棚田が広がっている。「竜宮小僧」と呼ばれる棚田最上部の湧水を導水・分配して棚田全体を潤している。

水源地の名称の由来となった竜宮小僧伝説は、次のとおり伝えられている。昔、竜宮に通じているという湧があり、そこから小僧が出てきて農作業など村人の仕事の手伝いをしてくれるようになった。ある日、村人が感謝して食事に招いたところ、小僧にとって毒となる「たで汁」を誤って食べさせてしまい小僧を死なせてしまった。悲しんだ村人たちは丁重に弔い小僧を葬ったところ、こんこんと湧水が出てきたというもの。

久留女木の棚田は、平安時代が起源と伝えられているが詳らかでない。天正 17 年(1589) 『天正検地帳』や元和元年(1615) 『遠江国引佐郡四拾七村高辻并寺社領諸運上物成之覚(龍潭寺文書)』に見える田地積の記録から 16 世紀末には棚田が築かれていたことが分かっている。また、大正 11 年(1922) 刊行の『静岡県引佐郡誌』に竜宮小僧と棚田の記載がある。

棚田の一角には「阿弥陀様の田んぼ」と呼ばれる田がある。この田では、東久留女木の万歳楽の当日、阿弥陀様に献上するためだけの米を栽培している。



図2-12-33 久留女木の棚田

③東久留女木の万歳楽に関する活動

ア.東久留女木の万歳楽

東久留女木の万歳楽は、2月1日に行われる。万歳楽の当日、久留女木の棚田で作られたお米が大切に炊き上げられ、本尊の阿弥陀様に献上される。柗に詰めて四角に盛った御飯を「おぶっこめし」と呼んでいる。東久留女木の祭事にも、かつては、川名のひよんどりのような「オブッコサマ」がいた名残と考えられている。

阿弥陀様に献上されるお米が生産される久留女木の棚田は、山頂付近に湧き出る清らかな水が水源となっている。この水源は「竜宮小僧」と呼ばれ、村人たちは田植えや稲刈りのあとに感謝の気持ちを込めてお参りしている。大正11年(1922)刊行の『静岡県引佐郡誌』には、竜宮小僧の死後、字中シゲの地に葬ると「清水渾々と湧出するに至れりとぞ現今中シゲの田は此水を以て灌漑しつつあり」と記されていることから、竜宮小僧信仰と深く関係する棚田の耕作が、当時から行われていたことが分かる。

この棚田の一角に「阿弥陀様の田んぼ」と呼ばれる特別な区画があり、万歳楽で阿弥陀様に供える御飯のお米を栽培している。その耕作は世襲制による禰宜役に任されており、身を清めて拜んでから農作業を行う。農薬や化学肥料を使わずに栽培しているだけでなく、この区画は女人禁制となっており、女性が農作業に関わることを禁じている。

午後6時過ぎ、東久留女木地区28戸の人々が阿弥陀堂に参集する。堂内での万歳楽に先立ち伽藍祭りが執り行われる。阿弥陀堂の西側に位置する伽藍様に七十五膳のお供えをする。七十五膳とは、ユズリハの上に少しずつ御飯を乗せ幾重にも重ねたものである。その後、如意院境内の外れにある神様に拝礼し堂内に戻る。

堂内の本尊前に座る禰宜を中心に参加者が車座になり、万歳楽が執り行われる。参加者には柗が配られる。禰宜が柗の枝を上下に振りながら「万歳楽、万歳楽、もひとつ万歳楽」と唱える。参加者も同じように万歳楽を唱えながら柗の枝を上下に振る。最後に参加者・参詣人全員に「おぶっこめし」や甘酒が配られ、午後8時ごろには万歳楽の行事が終了する。



図2-12-34 阿弥陀様の田んぼ



図2-12-35 禰宜の田植え



図2-12-36 伽藍祭り



図2-12-37 万歳楽

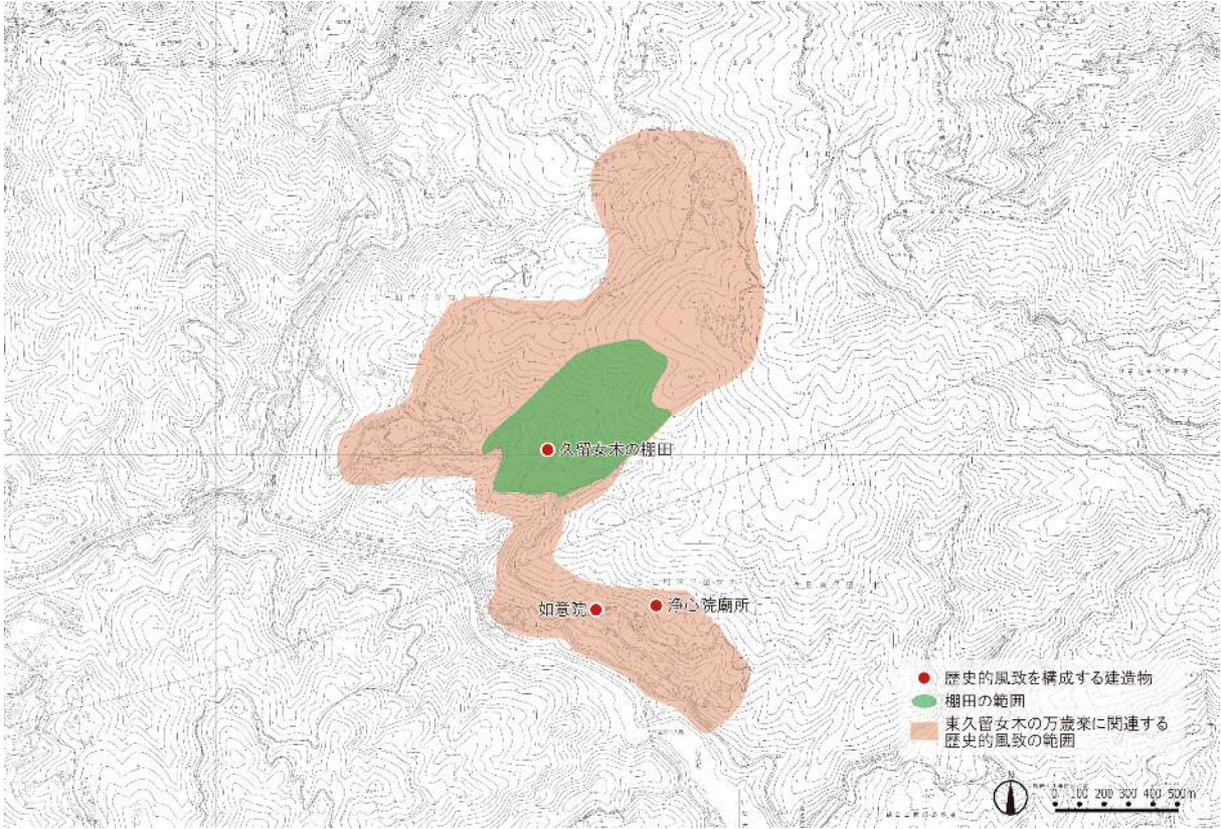


図2-12-38 歴史的風致の範囲(東久留女木の万歳楽)

(6) 滝沢のおくない

① 滝沢のおくないの歴史

滝沢のおくないは、四所神社で毎年1月1日に、林慶寺で1月4日を中心に行われる一連の正月行事の総称である。滝沢のおくないがいつ始まったか定かでないが、滝沢開拓の祖であり、現在も四所神社の禰宜を務める渥美家と山下家が当地に居を構えた16世紀中頃には原型となる祭事が行われていたと考えられている。天保5年(1834)刊行の『遠淡海地志』に「滝沢村 ヒヨドリ堂 正月七日有之」と記されていることから、江戸時代後期には今に伝わるおくない行事が行われていたことが分かる。

滝沢の正月行事は本来、大日堂で行われていたが、明治の神仏分離令により本尊の大日如来が林慶寺に移されたことで、シシウチ神事とシートー祭りは大日堂を社殿とした四所神社で、揉み飯祭りとは瓶子祭りなどは林慶寺で行われるようになった。昭和16年(1941)刊行の『静岡縣神社志』の四所神社・特殊神事の項に「古来よりしいと祭及び田遊祭の二祭行はる。」と記されていることから、シートー祭りなどの諸行事が明治以降も続けられていたことが分かる。また、林慶寺の諸行事のうち、昭和40年(1965)ごろまで揉み飯祭りは1月6日の夜、瓶子祭りは1月7日午前、大日如来祭りは1月17日に行われていたが、現在は揉み飯祭りと瓶子祭りが1月4日、大日如来祭りが成人の日の祝日に変更されている。

これらの祭りは、滝沢開拓の祖の子孫である渥美家と山下家がそれぞれ大禰宜・小禰宜と呼ばれる世襲の役を受け持ち、大世話人・小世話人と呼ばれる若い衆(青年会)によって伝えられている。滝沢のおくないは四所神社の祭りとは林慶寺の大日如来の祭りとは一体となり、滝沢地区の正月行事として地域をあげて今なお伝えられている。

② 滝沢のおくないに関連する建造物

A. 林慶寺本堂

浜名区滝沢町の中心部・本村に所在する曹洞宗の寺院である。明治13年(1880)の明細帳記載の由緒によると、寛永2年(1625)創立、延命地藏尊を本尊とし山号を延寿山と号する。

桁行7間、梁間5間半、寄棟造、平入、瓦葺の本堂は、寛政4年(1792)の建立であることが棟札により分かっている。本堂は、江戸時代には寺子屋として、明治5年(1872)からは初代滝沢小学校校舎として使われ、その後は昭和46年(1971)まで地域の集会場として使用されるなど、滝沢の中心施設として人々に親しまれてきた。昭和48年(1973)屋根修理を行うとともに、昭和60年(1985)に山門を、平成5年(1993)には鐘樓を建立している。



図2-12-39 林慶寺本堂

林慶寺は、明治の神仏分離により廃寺となった安楽寺大日堂の本尊・木造大日如来坐像(市指定有形文化財)を蔵している。延慶3年(1310)の胎内銘がある本像は、滝沢では「おだいにっさま」の呼び名で親しまれており、正月には大日如来の祭りとして「おくない」を今に伝えている。

林慶寺を会場とする「おくない」は、正月4日に揉み飯祭り・瓶子祭り、7日に先祖祭、9日に堂ごもり、15日(成人の日の祝日ごろ)に大日如来祭大般若が行われる。

イ.四所神社(旧大日堂)

浜名区滝沢町の中心部・本村に鎮座する神社で、滝沢の開祖となった渥美五郎左衛門が建てたと伝えられている。渥美氏は愛知県の渥美半島出身ということで渥美姓を名乗り、海を護る神々を迎え祀るようになった。神社の大禰宜は江戸時代から渥美家が代々受け継いでおり、幕末、滑伊神社神官の山本金木が残した安政5年(1858)『山本金木日記』にもその名が記されている。

祭神は、上筒男命、中筒男命、底筒男命、荒魂皇大神の四柱で、滝沢の氏神様として親しまれている。

社殿は、本殿と幣殿・拝殿からなる。拝殿はお堂とも呼ばれ、大正11年(1922)刊行の『静岡縣引佐郡誌』に、元は安楽寺大日堂の建物だったことが記されている。享和3年(1803)刊行の『遠江古蹟圖繪』によると、古く滝沢には安楽寺という大きな寺院があったが、戦国時代に焼失し、天明年間(1781-1789)に大日堂が再建されたとある。明治の神仏分離令により、本尊だった木造大日如来坐像と滝沢山の山号額は林慶寺に移され、天明年間(1781-1789)建立の桁行3間、梁間4間、入母屋造、平入、瓦葺の建物は四所神社の拝殿として用いられた。昭和27年(1952)旧滝沢小学校建設にあたり、当初位置から30メートル西の現在地へ移動(曳家)し、昭和32年(1957)から43年(1968)までは幼稚園園舎として使用されていた。小学校建設前の昭和10年代に写された古写真に曳家前の旧位置に所在する社殿が見える。

正月元日の元旦祭のあと、「おくない」行事として拝殿前庭でシシウチ神事が、拝殿内でシートー祭りが執り行われる。



図2-12-40 四所神社



図2-12-41 昭和10年代の滝沢・本村

③滝沢のおくないに関連する活動

滝沢のおくないは、シシウチ神事・シートー祭り・揉み飯祭り・瓶子祭りなどの四所神社と林慶寺で行われる一連の正月行事である。元日の四所神社元旦祭・シシウチ・シートー祭り、4日の揉み飯祭り・瓶子祭りなど、7日の先祖祭、9日の堂ごもり、成人の日の祝日ごろの大日如来祭・どんど焼きといった諸行事が行われる。

1月1日の午前9時、四所神社で元旦祭が執り行われる。拝殿での神事のあと、境内でシシウチが行われる。ミソバ(アオキ)の葉と枝でオス・メス2頭のシシを作り、農作物が食い荒らされないよう祈りながら若い衆が弓矢で射止め、足で蹴り倒し、シシの臓物に見立てた餅を取り出す。

拝殿に戻り、シートー祭りが始まる。小禰宜の山下家がネンネコサマと呼ばれる神様(稲霊)を背負い、若い衆が脚を回してネンネコサマを笑わせると、参加者一同が一斉に笑う。その笑い声が大きければ大きいほど村に大きな幸せが訪れるといわれている。その後、ネンネコサマを持って本殿を向き「やわらげなや 閏年の御子なれば 持ち物までも色白く 代々とシートー シートー シートー」と唱える。

1月4日は林慶寺で大日如来の祭りが執り行われる。林慶寺での行事に先立ち、禰宜と若い衆が四所神社に参拝する。参拝から林慶寺に戻ると、大日如来に供えてある御飯を境内に持ち出し、揉み飯祭りが始まる。村人が東西に分かれ、綱引きのように藤蔓を引き合う。中央の莫座の上では、大禰宜と小禰宜がお櫃に入った御飯を揉む。勝った組の豊作が約束されるといわれている。

昼食には七草がゆが用意される。若い衆が「唐土の鳥が日本の国へ渡らぬ先に 七草なずなでストントン」とまな板をすりこぎで叩きながら3回唱えて野菜を刻む。

午後2時、瓶子祭りが始まる。瓶子とは神酒徳利のことであるが、滝沢では「瓶治」「平治」とも記し、世の中が平和に治まりますようにという願いを込めている。まず、大日如来役の住職に柄杓・瓶子・葉付き大根などの供物が供えられる。葉付き大根を用いた祓いなどを行い、供物が片付けられると平膳(五品の精進煮物・盃・箸)と酒が運ばれ、しばらく歓談が続く。最後に高盛飯が配膳され、瓶子祭りも盛り上がりが高潮に達する。高盛りにした飯は「今年もお米がたくさんとれますように」という願いが込められた造形であり、食べ残しはできない。参列者全員が食べ終わると瓶子祭りが終わる。

午後3時過ぎ、シシウチとシートー祭りが元日同様に行われる。シートー祭りが終了すると、大日如来の供物が下ろされ参詣者に配られ、大日如来の祭りが終了する。

1月7日は林慶寺で先祖祭、1月9日は四所神社と林慶寺で堂ごもり、成人の日の祝日ごろには林慶寺で大日如来祭大般若とどんど焼きが行われ、一連の正月行事であるおくないが終了する。



図2-12-42 シシウチ



図2-12-43 シートー祭り



図2-12-44 揉み飯祭り



図2-12-45 瓶子祭り

表2-12-6 滝沢のおくない次第(平成 31 年正月)

日時			内容
1月 1日	午前 9時 00分		元旦祭 シシウチ シートー祭り
1月 4日	午前 9時 00分		準備
	午前 10時 00分		ししよ 四所神社参詣
	午前 11時 00分		もめし 揉み飯祭り
	午後 0時 00分		七草がゆ
	午後 2時 00分		へいじ 瓶子祭り
	午後 3時 15分		シシウチ・シートー
1月 7日	午前 9時 00分		先祖祭
1月 9日	午前 9時 00分		堂ごもり
1月 13日	午後 2時 00分		大日如来祭大般若
	午後 3時 00分		どんど焼き

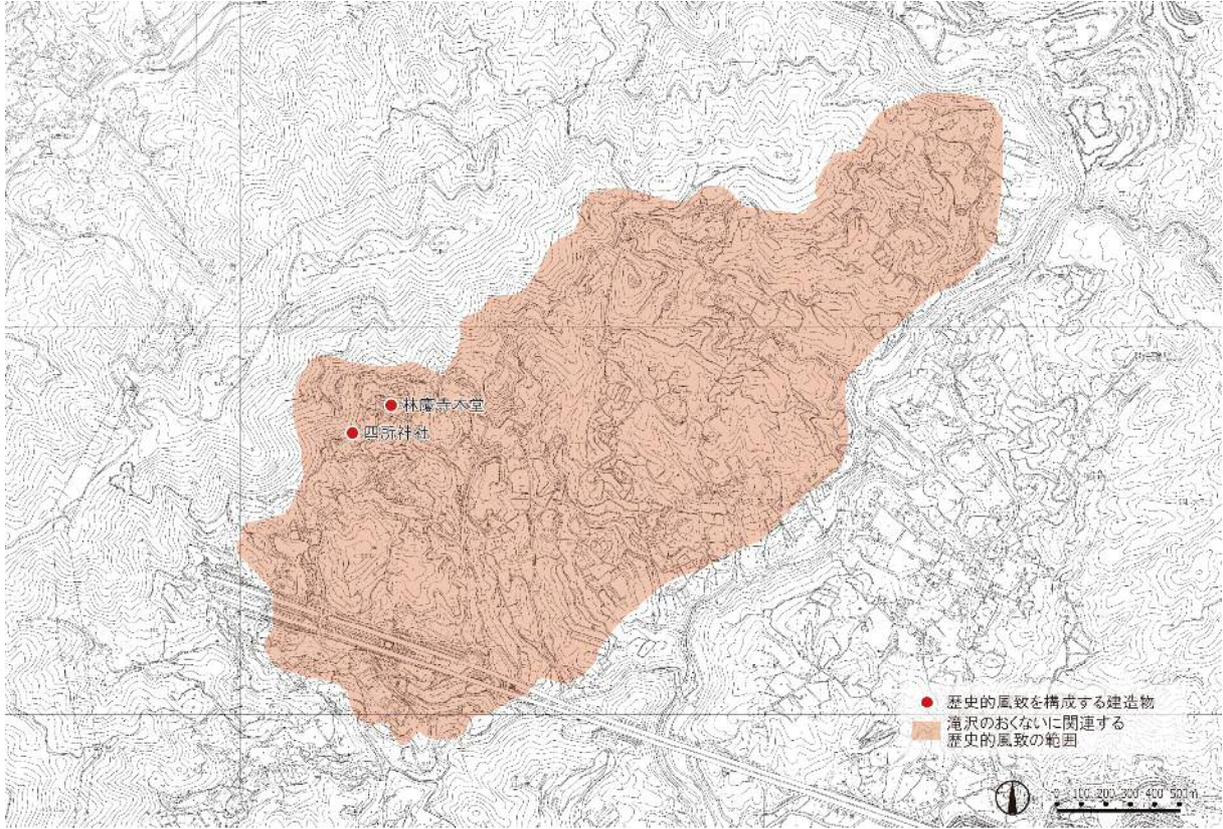


図2-12-46 歴史的風致の範囲(滝沢のおくない)

(7)まとめ

寺野・川名・懐山・久留女木・滝沢の各地域の正月行事として継承されてきた「ひよんどり」「おくない」は、中山間地域に根付いた信仰の形を表すものであると同時に、共同体のアイデンティティを支える重要な要素ともなっている。

山懐に抱かれた里は大自然の豊かな恵みを楽しむ反面、自然災害にさいなまれた歴史を繰り返してきた。当時の人々が自然に畏怖し、敬い、共に生きてきた証が「ひよんどり」「おくない」であり、その祈りは今も絶えることなく続いており、毎年、希望に満ちた年明けの山谷にこだましている。寺堂などの建造物や自然と共存した伝統的な棚田、中山間地域の農村景観と調和した傾斜地に開かれたまち並みとあわせて、将来にわたって大切に維持し、向上させていきたい良好な歴史的風致である。

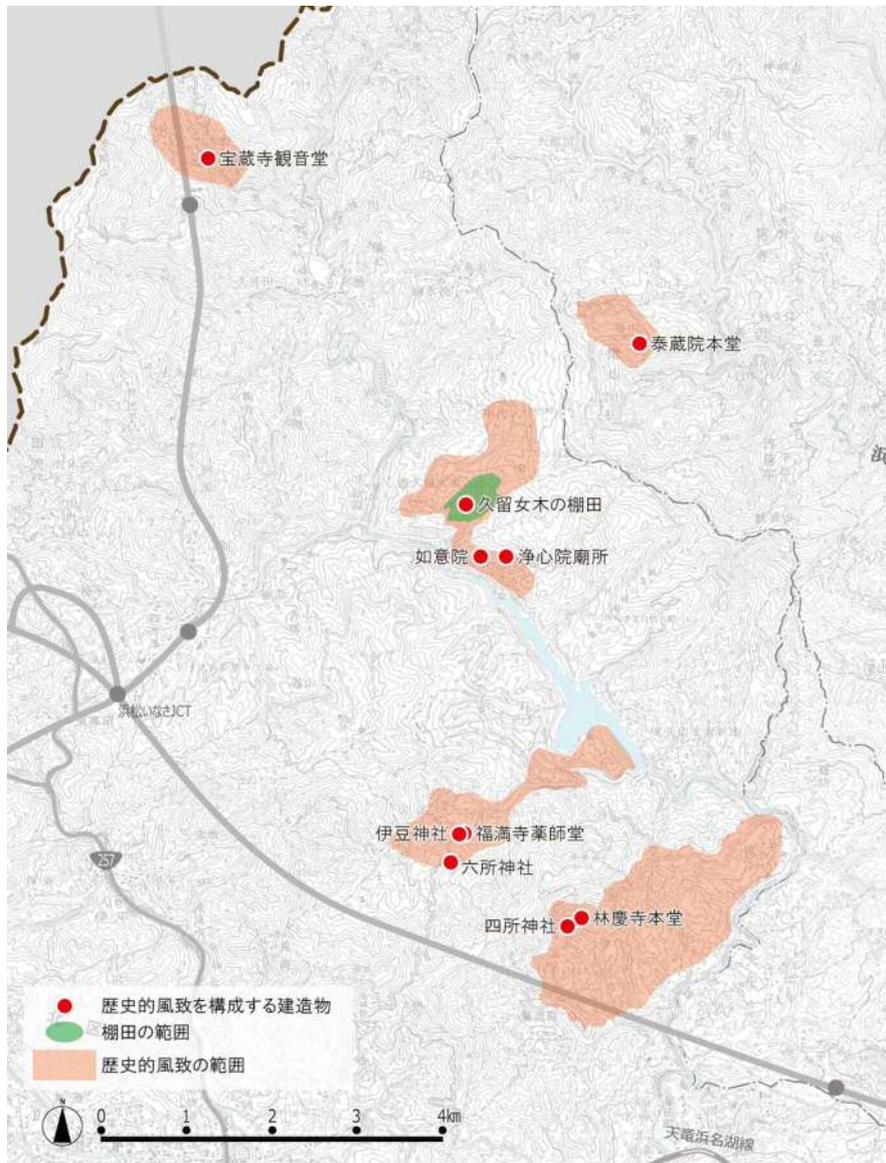


図2-12-47 遠江のひよんどりとおくないにみる歴史的風致の範囲

第 2 章

浜松市の維持及び向上すべき歴史的風致